

1. はじめに

京都府高体連ボウリング専門部の秋元充秀と申します。今大会開催にあたりご尽力頂いた関係者の方々に御礼を申し上げるとともに、この度このような貴重な経験をさせて頂くことに感謝しております。ありがとうございました。私は、平成10年4月から現在に至るまで京都市のほぼ中心に位置しております洛陽総合高校(当時洛陽女子高校、平成11年4月より男女共学に改編)で英語科教員として勤務しております。中学・高校・大学時代はハンドボール部に所属し、私自身が部活動を通じて得た人間教育や人生観・技術をもとに是非ハンドボールの指導がしたいという熱い気持ちを胸に本校で教鞭をとることとなりました。

教員生活1年目の顧問生活は私にとっては夢が実現した喜びを毎日実感できる充実した日々でありました。1年間が終わろうとした2月、突然私は、平成11年度より新設するボウリング部の顧問を持ってないだろうかという打診を受けました。今だから言えることですが、衝撃が走り、私はハンドボール部には必要とされていないのではないかと自分を力のなさを責めた日が続きました。高校時代にご指導頂いた恩師の『ピンチはチャンスじゃないか!』という声に励まされたことが思い出されます。部活動の良さは時代を超えても自分たちが汗を流して取り組んだ歴史や思いというものがあるといつまでも色褪せることなく残り、人と人をつないでくれるものだと思えることができました。そして未知なるボウリング部を担当する決心をすることができました。

そのような経過を経て現在まで試行錯誤を繰り返しながら、ボウリングを通じて生徒に対して人間形成を行い、平成19年度には京都府高体連にボウリング専門部を創設することができました。ボウリングを通じて私はたくさんの方々から技術はもとよりスポーツマンとしての心の在り方や考え方について学ぶ機会を持つことができました。『何事もやってみなければわからない。与えられた環境の中で如何に成果を残すのかを考える。自分に乗り越えられない困難や壁はない。』これは私がボウリングを通じて経験し感じる事ができた信念であります。この志を自ら実践することで生徒達もスポーツボウリングに対して本気で取り組むようになりました。そして現在までボウリング部を発展させることができたことは、ボウリングが私を育ててくれたのだと心から思うことができ感謝しています。本日は、貴重な時間を頂き、私が13年間関わってきたボウリングを振り返り、ボウリングの魅力や部活動として果たす役割、生徒に与える教育的な側面についてレポートさせて頂きたいと思っております。

2. 現在のボウリング界における高校生の活動状況について

現在、青森県・石川県・神奈川県・三重県・京都府・岡山県・沖縄県の7府県におきまして高体連にボウリング専門部を配置しています。図1をご覧ください。この組織図はボウリング界の組織図でございます。高校でボウリングを行う際、高体連に所属する府県の高校ボウリング部と高体連がない高校ボウリングも共に競技ボウリングを進めていくうえで、まずは上部団体であります公益財団法人全日本ボウリング協会(以後JBC)に学校登録を行い、それぞれの選手が選手登録を行っています。選手登録には、高校生会員と高校にボウリング部がない選手はジュニア選手として登録をすることができます。その下にはそれぞれの府県の体育協会によって認定されて設置されたボウリング連盟に所属し、高校あるいは社会人クラブの中でのジュニア選手としてボウリングの活動ができる仕組みになっています。

図2をご覧ください。これは、平成24年度にJBCに登録された各府県におけるジュニア選手と高校生会員数です。現在18歳未満のボウリング競技者人口は2159名となっております。男子1600名、女子559名が現在登録されております。その中で高校生が占める割合について、高校生男子1112名(69.5%)高校生女子292名(52.2%)、全体では1404名(65.0%)ということで競技者には高校生以上のボウラーが非常に多いことがうかがえます。これは国民体育大会(以下:国体)の正式種目であるボウリング競技への参加と活躍を目標に各府県のボウリング連盟が普及活動と競技力の強化を積極的に行っていることへの理解が伺えます。現在国体ボウリング競技は中学3年生からの出場が可能であり、各ボウリング連盟は中学時代から有望選手の発掘を行い、高校での成果が見込めるように競技力の強化を行っていく体制が整っております。近年では

世界に通用する選手の発掘と育成を目指し、全日本小学選手権大会並びに全日本中学選手権大会が開催され年々参加選手の数も増加の一途を遂げております。

高校生ボウラーにとりましては、7月に東京都品川プリンスホテルボウリングセンターで行われる『ジュニアオリンピックカップ争奪全日本ボウリング選手権大会』と国民体育大会、12月に神奈川県川崎市で行われる『文部科学大臣杯争奪 高校対抗選手権大会』の3大会が高校生ボウラーにとって大きな目標となります。

また近年では、高校でのクラブ活動の一環としてボウリングに取り組む学校が多くなりました。現在、高校部活動としてボウリング部を設置している学校数が全国で77校であります。これは特に高体連を設置している府県を中心に特に顕著な数字が見られます。青森県では11校172名、石川県では7校140名の登録、神奈川県では9校82名、三重県では3校53名、京都府では5校34名、岡山県では3校45名、沖縄県では4校66名の選手を登録しています。高体連所属の選手の数は592名になり、高校数としては54%、高校登録をしている選手数が1035名おりますので、高校生ボウラー全体の2人に1人は高体連所属の選手であることが分かります。高体連に所属している選手のほとんどは高校から教育の一環としてスポーツボウリングを始めた選手が多く、この流れは今後も増えていくことが予想できます。このような地道な活動を通じてスポーツボウリングの競技人口と競技力が増強されていきました。

今後の高体連への加入に向けて選手層を厚くし、地道ながらも存在感を表しているのが東京都・愛知県であり、日本代表選手を要する実力を持つ福岡県も今後の高体連加盟に向けて前向きな活動を行っております。

現在私達は横のつながりを強化し、念願の全国高体連ボウリング専門部創設とインターハイ競技開催の実現を目指し、全国高体連ボウリング専門部加盟連合会という組織を平成18年に創設しました。高校ボウリングの健全な発展を目的に8月のインターハイの時期・3月の高校選抜大会の時期に大会を実施しております。特に、3月の大会は『春高ボウリング』というネーミングをつけ、競技を主管する団体を高体連設置府県で順番に輪番した全国大会を毎年行っております。昨年度は京都府で第15回大会を開催することができ、こちらの大会も年々参加者、参加校が増加しておりスポーツボウリングが学校教育の一環として認知され競技の輪が広がっていくことが大きく頷ける結果となっております。

上部団体であるJBCも高体連加盟の府県を増やすことがボウリング界の競技力向上の底上げにつながることは言うまでもなく、ボウリングを通じての心身の健全な発達につながる態度を養う望ましい機会として期待が持てることを確信し、私達高校ボウリングへの活動に際して助言と協力を頂いているところであります。

3. スポーツボウリングの競技性と教育効果について

私はこれまでの教員経験の中で部活動における生徒指導ほど生徒の人間力を発展向上させる手段は他にないと考えてきました。もちろん日常の教科指導と生活指導の両輪が機能していることが大前提です。私にとって、生徒の人間的向上を遂げる手段がたまたまボウリングであり、ボウリングを通じて公平性や社会性、心身のバランスのとれた健全な人物の育成を目指しこれまでの指導に関わってまいりました。本校の生徒は学力不振など、これまでの成長過程の中での成功体験が少ない生徒が少なからずいるのが現状です。ボウリングを通じて、生徒に勝つことを体験させる、夢を語れるスポーツがボウリングであると確信しています。

(1) ボウリング技術の発達と課題となるテーマが明確である。

スポーツボウリングが高校教育に与える魅力が何かと考えると、練習の成果をスコアで実感できることにあると思います。言い換えれば『練習は結果を裏切らない』のです。相手は動かないピンですから言い訳ができないところに競技の魅力が潜んでいます。どんなスポーツでも他のライバル選手に勝つ、大会で優勝するという目標がありますが、ボウリングの場合には自己ベストを超えるという自分を超越するハードルが目標になるところに魅力があります。また、運動が苦手な生徒でも誰でもできるスポーツです。実際に、「レジャー白書2011」によれば、昨年、日本国内でボウリングをした人は1780万人。体操やジョギング、マラソン、トレーニングに次いで4番目に多い数字でした。

ボウリングはレーン上にオイルが塗られており、オイルの量が多いオイリーゾーンと少ないドライゾーンを見極めなければなりません。投球されたボールはオイル上を滑っていきオイルが無いところで転がり始めます。レーンとの摩擦でボールが曲がり始めるのです。ですから選手は、レーンコンディションに応じてそれぞれの板目 5 枚に記されたスパットと呼ばれる目標にいかにか正確に投球できるかが問われます。ストライクを出す最も大切な要因は、1 番ピンと 3 番ピンの間をポケットと呼んでいます、そこに 3 度～6 度の角度で投球しなければなりません。ストレートボールの人がポケットにボールを投げようとすると、隣のレーンから投げなければならないこととなります。ですから、摩擦係数を上げて回転数を上げることによりボールが曲がり角度のあるボールを投げることが出来たときにストライクが生まれることとなります。

図 3 はボウリングのキャリアとスコアの相関関係を表した図になります。入門から上級者までの投球内容についてアメリカナショナルチームコーチ、トムコーラス氏による調査結果を示したものです。もし 190 点以上のアベレージの上級者を指すのであれば、1 ゲームにおけるヘッドピンに当たる確率は 89% なければなりませんし、ストライク率は 48%、スペア率が 70% 必要であり、なおかつ連続ストライクが 2～3 回出せる技術が必要となります。ですからまずは初心者・中級者はボールをヘッドピンに当て、スペアをとることを目標に練習することになります。そうすることで安定したスコアを維持することができるのです。そして上級になればなるほどストライクボウリングを要求されることとなります。競技者の目標や発達段階に応じて目標を立て努力することで、成長を自ら実感できるところに教育的な魅力があります。ちなみに今年度の全国高校選手権大会で優勝した選手は、2 日間で 12 ゲームを投球し、男子で 2990 点、つまりアベレージは 249 点、女子は 2733 点でアベレージは 228 点でした。まさに高校生の競技力は日増しに向上しているといえます。

(2) ボウリングとは『心・技・体』を兼ね備えたスポーツである。

ボウリングは、技術だけでは勝てないスポーツであります。選手権大会と名付けられた公式戦では 1 日に最低でも 9 ゲームは投球することになります。長丁場の競技の中で、選手に必要な力はレーンを攻略する分析力と自らが合わせられる適応力・同じフォームで狙ったところに投球するバランス力、苦しい時に我慢できる強い忍耐力や精神力が必要であると言えます。緊張して力が入るとボールが指から抜けにくい、スムーズな投球フォームができないなどの問題点が生じます。『練習でできないことは、本番でもできない。』これは私の持論です。精神的に追い込まれた厳しい練習を続けなければ、技術は向上しても試合では勝てないのです。本校ボウリング部ではその点を重視しており、大会直前まではスコアをつけるゲームをしません。目の前のピンを確実に倒すことだけを考えて投球することを体で覚えさせることから入ります。月曜日から土曜日まで毎日練習していますが、その中でボウリング練習は週 3 回 2 時間～3 時間行っております。練習内容は、初めの 30 分は投球動作やフォームの確認、残りの時間は、ただひたすらピンを倒すことだけです。スペアもしくはストライクを重ねていく練習を念頭に行います。失敗すれば、その度スクワットをします。罰という消極的な発想では決してなく、自分のボウリングを一度考え直し、何故先程の投球がミスしたのかを考えさせるためです。試合中の失敗は精神的にも自分を苦しめます。練習とは、失敗を成功に変える場所であると思います。また、本校では週 2 回はレーニングを行っています。トレーニングは、激しいものではありません。怪我の予防、パフォーマンスの向上、精神力の向上が目的です。柔軟・ランニング・筋トレ・体幹トレーニング・走り込みなどを通じてボウリングにおける投球を支えるための重要な要素であると考えて行っております。まさに、ボウリングとは心・技・体を兼ね備えたスポーツであると言えます。

(3) ボウリングとは『礼に始まり礼に終わる。』感謝の心や社会性を育てられるスポーツである。

全国に 77 校ある高校ボウリング部ですが、ボウリング場を持つ学校は残念ながら 1 校もありません。ですからそれぞれの高校から通えるボウリング場でレーンを借りて練習をするしかありません。経済の不安定な状態が続くレジャー産業が収縮する中、ボウリング業界も底冷えの状態が続いております。1970 年代に起こったボウリングブーム時には 3880 センターあったボウリング場も現在では 925 センターに減ってしまいました。ボウリングブーム世代に継ぐ次世代の若者達に広くボウリングの面白さや魅力を与え競技者人口を増やそう

とどのセンターも生き残りを考え試行錯誤の日々を繰り返しています。実際私が調査したボウリング場が主催する競技会への参加者は男性の平均年齢が 54 歳、女性が 46 歳でありいわゆるシニアボウラーが集まることが多いのが現状です。どのボウリング場も平日の午前中は団塊の世代の方々が生涯スポーツの一環として練習をされ、午後はほとんどのレーンが空いている状態が多いというのも現状です。

元々、本校にボウリング部ができるきっかけも生涯スポーツとして体育の正課授業で行われたことでした。当時、お世話になったボウリング場は本校からマイクロバスで約 15 分のところに位置し、アクセスも良く、授業はインストラクターが技術指導を行って頂きました。料金も通常のゲーム数ではなく、約 2 時間週 1 回の授業に対して 500 円（靴代・送迎代を含む）で年間 20 回を実施、実技以外は、校内で座学を行いました。インストラクターが本校まで来て、ボウリングの歴史・ルール・スコア計算の仕方・投球技術など熱心に指導して頂きました。料金については、合計 1 万円を年度当初に生徒が負担するという形式でした。2 年間行っていた体育授業を通じて、スポーツボウリングをしたいと興味を持つ生徒たちが増え、週末になると生徒が家族でボウリングを楽しむという光景が増えていきました。また、もっとボウリングが上手になりたいと考える生徒も増えていき、ボウリング場支配人の方からのご提案と京都府ボウリング連盟からの支援を頂き、平成 11 年度より本校でボウリング部が誕生しました。残念ながら、その後、お世話になったボウリング場は閉鎖されてしまいました。私たちは練習場所を失い、途方に暮れる日々を送りました。ボウリング部解散を決意しなければなりません。高校生に悲しい思いをさせたくない、ということで支配人の方のご尽力があり、現在の練習場所に移動することができました。

練習費は、毎月 3000 円。1 回の練習で約 7 ゲーム分に相当するゲーム数を投球し、月 20 回はボウリングの練習をしていますので、1 ゲーム単価はわずか 20 円ほどの値段で利用させて頂いていることになります。

また用具の面でも保護者の経済的な負担を軽減して頂いています。ボウリングをする上で必要な用具は、ボール・シューズ・ユニフォームです。ボールは、定価で購入すると約 2 万円程度費用がかかります。保護者の経済的負担を軽減するためにも、本校では一般の大人の方からもう使用しないボールを頂いています。すでに穴の開いている古いボールを再利用するため一度穴を特殊な液で埋めます。そして使用する選手の親指の大きさや指の長さに合わせてプロボウラーの方にドリルし穴をあけ直して頂きます。そのような作業を得て、個人のマイボールを作っております。また、シューズについても仕入れ価格で販売して頂くなど費用の面でも高校生がボウリングを行う上で最大限の協力をして頂いております。

ボウリング場のスタッフの方々への感謝の気持ちを持つことで、自分たちが応援している人々の期待に応える気持ちが生まれ、自ずと練習に臨む姿勢も良くなります。『練習場所があるから自分たちが輝けることを常に忘れてはいけない。』本校の練習では、常にセンターの方に対して礼を尽くすことを教え、センターに入る際、練習開始の際、練習終了後に感謝の気持ちをこめて挨拶することを徹底しています。もちろん、好きなボウリングをさせてもらっていることについて両親に感謝することは言うまでもありません。学生の本分は勉学であることを伝え、勉学とボウリングとの両立を図ることを徹底しています。

また、公式戦の中には、大人のアマチュアボウラーの方と共に競技する大会もあります。キャリアのある選手から様々な声をかけて頂き成長のきっかけをつかむ生徒もいます。競技前には、挨拶から始まり、競技後にはあいさつで終わる。このことを通じて、様々なアマチュアボウラーからも温かく時には厳しく育てて頂いております。ボウリングは個人競技ですが、競技者の裏側には見えない様々な人々が関わっているのです。

(4) ボウリングには夢とチャンスが満ち溢れている。

1988 年の京都国体からボウリング競技が正式種目として採用されました。またアジア競技大会においてもボウリングは正式種目であります。私達の上部団体は、夢のオリンピックでの正式種目認定を目指して努力しているところと聞きます。そんなボウリングには、自己実現に向けての無限の可能性とチャンスがあるスポーツだと思います。

国体と共に高校ボウリングにおける最大の目標は毎年 12 月に行われる『文部科学大臣杯争奪全国高校対抗

選手権』であります。高校ボウリングの甲子園という愛称で、高校日本一を決める競技が神奈川県川崎市で行われております。予選 9 ゲームの 2 名の投球合計で 8 チームが決勝に進出し、予選の順位に基づいて決勝トーナメント戦が行われます。このトーナメントの優勝決定戦について衛星放送ながらも TV 放映されました。昨年の映像を少し紹介したいと思います。

最後まで一進一退の戦いが繰り広げられました。惜しくも本校は準優勝でしたが、この大会を通じて改めて 1 投の大切さを痛感することができた大会でした。

また平成 22 年度、本校の生徒が 20 歳以下の日本代表選手であるユースナショナルチームに入りました。国際大会での活躍は、今のところ果たしていませんが、ボウリングの魅力は短期間で急激に技術が飛躍することができることです。プロボウラーの大会にアマチュア推薦選手として参加できる大会もあり、若さあふれるパワーを発揮し、トッププロを相手に挑戦し準優勝を果たすことができました。その模様もご覧ください。

このようにボウリングは、スポーツであり観ている人に対して大きな感動と夢を与えることができる要素も兼ね備えています。

4. 高体連加盟と普及発展について

平成 19 年度 4 月に京都府に高体連ボウリング専門部が設立され、ますます教育活動の中でのボウリングがクローズアップされるようになりました。これにより、これまでジュニア登録をして個人で活動していた選手も高等学校に高校登録を行い、顧問の先生の指導、監督のもと活動が行われるようになりました。選手の間にもボウラーとしての自覚も芽生え、学校での教育活動と部活動を並行して行い、徐々に競技成績にも表れるようになっていきました。高体連専門部にボウリング専門部を設置して頂いたことにより、選手の競技力の向上とこれまで以上に競技に取り組む姿勢が良くなり、意識の高揚が図られ、京都府では設置元年に全国高校選手権大会で男子選手が優勝、平成 20 年度大分国体での入賞、平成 22 年度に全国高校対抗選手権大会で優勝、翌年平成 23 年度には準優勝、今年度の岐阜国体での入賞を果たすなど、京都の高校生の実力が全国に通用するようになりました。

(1) 京都府における高体連新規専門部設置について

平成 18 年度に私は、これまで高校にボウリング部がない生徒のボウリングの活動実態について調査を行いました。高校生が社会人クラブに加入していることから練習開始時間が夜遅いこと、レジャースポーツとして親しむ大人と共に競技を行うことによる生徒に与える影響について考えると以前より教育者として憤りを感じておりました。やはり、高校生は高校生同士がお互いの力をぶつけ合う環境が必要であると感じておりました。また 3 校あるボウリング部を 1 つにまとめる組織作りを行う必要性を感じており、高体連にボウリング専門部を設立したいという熱い思いが沸々と沸き起こりました。私の思いを理解して頂いた、社団法人京都府ボウリング連盟、JBC、京都府高体連の皆さんのご指導とご協力があったからこそ設置につなげることができたと思います。京都府では、毎年宇治市におきまして、『文部科学大臣杯全日本中学選手権大会』が開催されております。中学選手権に向けて京都府ボウリング連盟も選手の強化と普及に努めております。会場となるキョーイチボウル宇治（株式会社 松原興産）のご支援により中学生の練習費をほぼ無料とすることで、たくさんの選手が大会に向けて競技力の向上を図ることができました。そしてその選手の受皿として高体連ボウリング専門部に加盟している高等学校への進学を果たす流れが生まれました。

京都府高体連における新規専門部の設置について規則で銘文化された設置基準条項はありません。よって私の経験による見解では、以下のような内容や書類手続きを基に、初会議を経て審議され、承認されることになるようです。もちろん、長年にわたる競技の普及及び競技力の向上に向けた取り組みを礎に、高体連規約に則った継続的かつ発展的な活動が今後、見込まれるかどうかの姿勢があるかどうかはまずは重要であると思われ

- ①日常的に活動の実態がある代表校として3校以上の校長の連名による設置申請書の提出
- ②府県内の競技団体からの具申書の提出
- ③全国競技団体からの具申書の提出
- ④当該競技に出場している諸大会の参加状況の報告書の提出
- ⑤各校の過去5年間の活動状況報告書の提出
- ⑥前年度の高校生出場の府県大会レベルの大会要項及び収支決算書
- ⑦次年度事業計画案
- ⑧全国高体連調査に基づく加盟状況実態把握
- ⑨府県の体育協会加盟競技団体のバックアップ体制

京都府高体連ボウリング専門部における事業は以下の通りです。

- ・京都府高等学校総合体育大会ボウリング競技の部（京都府総体）－5月実施
高体連加盟校全国選抜大会予選
- ・京都府高等学校個人選手権大会（9月実施）
- ・京都府高等学校選手権大会（11月実施）－全国高校対抗予選
- ・京都府高等学校新人選手権大会（12月実施）－春高ボウリング予選
- ・京都高等学校強化事業（年1回実施）

（2）まとめ（今後の展望と課題）

ボウリング競技において、これまで高校生選手に対してジュニアという言葉を使用する以上に高体連という言葉を使うことの方が多くなってきたように感じるように、高体連加盟選手が活躍する機会が増えてまいりました。高体連ボウリング専門部を設置した次の目標は、全国高体連にボウリング専門部を創設させることです。まずはボウリング専門部を持つ府県が加盟校数と部員を確保し、年々選手の増加を果たすことだと思います。また、高校ボウリング部で活動した選手がボウリング部のある大学への進学を行い、精力的に活動をしております。ボウリングが人間形成の一助になることを改めてお伝えしたいと思います。今後全国高体連ボウリング専門部加盟連合会を通じて、次の高体連ボウリング専門部を設置する府県の協力並びに助言を行い、仲間を増やしてまいりたいと思います。しかし、高体連設立には、積極的に運営に関わる役員の先生方の熱意やご賛同が必要になります。上部団体としてJBCへの協力を要請しながら意見交換を行い、インターハイ実現に向けてこれからも精一杯尽力いたしますので、今後のご支援とご指導を賜りますことをお願いいたします。本日はご清聴頂き有難うございました。